2022.12.16 長周新聞

# 新校舎巡る裁判で証言

## 下関市・梅光学院大学の3教員

## 研究も教育もできず

### 個人研究室廃止後の実情

下関市の梅光学院大学の教員九人が二〇二一年八月、学校法人梅光学院に対して研究環境の保障を求めて起こした裁判の証人尋問が一四日、山口地方裁判所下関支部でおこなわれた。梅光学院大学は二〇一九年に「日本初の教職協同のフリーアドレスオフィス」をうたった新校舎「クロスライト」を建設し、個人研究室を廃止した。ガラス張りの新校舎の「共同研究室」は学生や教職員だけでなく、コロナ前には一般市民も行きかい、研究ができない、プライバシーにかかわる学生の相談に乗ることができないなど、教育・研究に支障を来していることが問題となってきた。証人尋問では三人の教員がそれぞれの専門分野の研究や学生とのかかわりを通してその実情を証言した。

### 学問のあり方問う

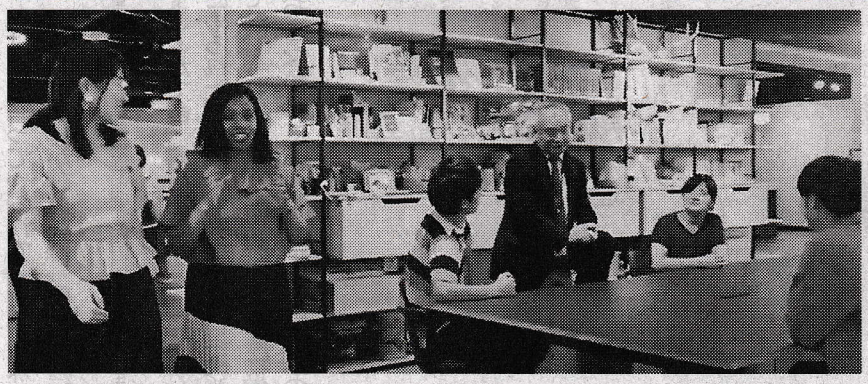
研究力低下する日本

提訴した教員たちは、この問題は大学教員、学生の学問のあり方にとどまらず、日本の学術の将来にもかかわる問題であり、裁判を通してあるべき「研究室」の形を多くの人に考えてもらいたいと訴えている。全国的にも「大学改革」の名の下に、地道な基礎研究の分野に予算が投じられない、多くの若手研究者が不安定な非正規雇用におかれるといった現状のなかで、日本の研究力が低下していることが指摘されている。「研究室の形を問う」という前例のない裁判は、学問や研究のあり方、大学教育のあり方をも投げかけるものとなっている。

証人尋問では、半導体物性などを研究分野とする教員、近世日本文学や地域文化を専門分野とする教員、ニホンザルなど霊長類の研究を専門分野とする教員の三人が証言した。

### 半導体物性研究の教員

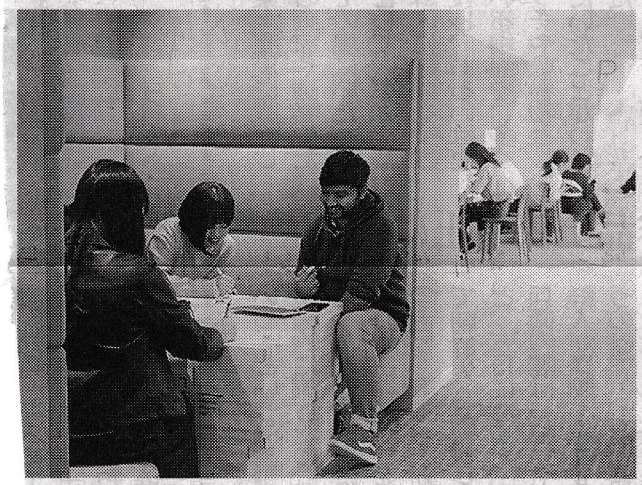
半導体物性などを研究分野としている教員は、一〇台の高速計算用のコンピュータをもちいて数カ月から二年単位でデータを取得し、分析するといった研究をおこなっている。しかし、「共同研究室」と呼ばれるスペースには個人の書籍を置く本棚一竿しかなく、コンピュータを置くことができない。現在は共同研究者のいる県外の他大学に設置しており、週に一度しか行くことができない状態で、研究が阻害されていることをのべた。コンピュータは長期稼働が必要なので途上でメンテナンスが必要だ。研究室の廃止前は、音で故障の予兆を判断して部品交換するなど予防補修をおこなっていたが、現在は遠隔地にあるため、そうした対応が不可能になっている。事前にバックアップをとることができなければ、数年かけて取得してきたデータを失ってしまう危険性もあるという。



学生などが行き交う共同研究室（梅光学院大学HPより）

論文執筆作業についても、膨大なデータを扱うのに必要なデスクトップパソコンを設置するスペースがないうえ、常に人が行きかって周囲の雑音を防ぐことができないので、夜間に自宅で作業する状態になっているという。試験問題の作成も同様であり、漏洩してはならないもの、プライバシー性の高いものについては自宅が作業場所となっていることをのべた。

またオフィスアワーについて、以前は時間帯を周知し、アポイントメントなしで学生たちが研究室を訪れていたが、フリーアドレスでは教員がどこにいるかわからず、学生が探さなければならなくなっていること、現在の建物はプライバシーを保護しながら学生と話ができる場所がないことを指摘した。ブース席は五つあるが、衝立で仕切られているだけであり、事務職員が業者対応に使用していることも多いという。学生たちとの関係では、授業に関する相談以上に、人間関係や経済事情など、学生生活に関する相談が多く、その相談を受けながら卒業まで伴走してきたことにふれ、研究室がなくなり、そのような学生対応が困難に



衝立で仕切られているだけのブース席。プライバシーにかかわる話は困難（梅光学院大学HPより）

なっていることを明らかにした。そのうえで、日本では研究力の低下がすでに問題になっており、「研究力、教育力の低下が国力の低下につながるのではないかと考えている」とのべた。

## 日本文学研究の教員

江戸時代の日本文学や地域文化を専門にしている教員は、源氏物語をはじめとする日本文学は、平安から明治にかけて原本を筆で書き写した「写本」によって現代に伝えられていること、研究者はそれをさらに撮影した複写版を使って書き込みなどもしながら研究を進めていくことにふれた。しかし写本の複写版はB4版ヨコ原寸大のコピー。写本にはさまざまなバージョンがあり、複写版も最低五冊はあるため、現在の研究スペースではこれらの資料や古文書解読のための字典などを広げて研究することは不可能であることを指摘した。

個人研究室の廃止で、江戸時代の版本数百冊をはじめ貴重な資料や書籍などを適切に保存する場所がなくなった。自宅に一〇〇〇冊を保管しているが、本棚に入りきれず床に積み上げられている状態のほか、県外の実家にも数百冊を移動しており、研究に必要な資料が散逸している現状を語った。図書館二階に教員一人につき三竿分の書架スペースがあるが、エアコンは元が切られて空調がなく、夏にはトイレの臭いが充満するような状態だという。和紙には茶立虫などの害虫が湧くため、およそ二〇〇年前の貴重な資料を保存環境の整っていない場所に置くことはできないと訴えた。

なにより、これら二〇〇年前につくられた本物の版本や地図などに学生がふれるなかで、日本文学に興味を持ち、主体的な学びにつながってきたが、現在では三〇～一〇〇人の授業で見せる程度となっており、学生たちがそこから専門的な学び、研究に展開する環境が失われていることの損失を語った。

また同教員は、地域貢献の分野で、山口県内の劇場で無料配布された戦前・戦中・戦後のパンフレットを収集しており、その広告などから戦況や当時の町の様子をつかむなど、地域文化の研究も学生とともにおこなってきたが、これらの資料もほとんど手元に残っておらず、地域文化の研究もできなくなっていることを明らかにし、研究室は専門研究資料の置き場にとどまらず、そこで専門研究がおこなわれる場であり、ゼミ生や大学院生がさまざまな資料に出会う教育の場であり、地域貢献に資する資料の保管庫ともなる場であることを強調し、現在の北館一階教員用の研究スペースではこれらの活動が困難であることを訴えた。

## ニホンザル研究の教員

ニホンザルの研究を専門分野としながら、幼稚園や小学校教員の養成にかかわる授業をおこなっている教員は、ニホンザルの研究で使うフィールドワークの手法をゼミにもちいていることをのべた。たとえば竹林整備のボランティア団体と連携し、全国的に問題になっている放置竹林の問題に地域の子どもたちがふれる環境教育を学生が主体的に企画し、実施するなどしているという。しかし、実際に竹を切り出してきて準備するなどの作業を「共同研究室」でしていると、集まって話しているだけで「うるさい」と注意されたり、周囲の授業の音が聞こえてくるので落ち着いて作業することができない。研究室に自由に集まり、作業やミーティングをしながら試行錯誤するという、これまでできていた学生の研究活動が圧倒的に制限されていると指摘し、「研究室には私がいて、横で学生が自由に研究をしている。いつでもコミュニケーションがとれる環境がなくなった」とのべた。

専門分野の研究についても、「共同研究室」では人が行きかって雑音が多く、顔を上げればだれかと視線があい、落ち着いて仕事ができず、図書館の閲覧室で作業をしているとのべた。研究に必要な書籍や資料は自宅に保管しており、自宅から資料を持参して図書館二階に運び、授業時間には再びそれを抱えて移動し、授業が終わればまた資料を抱えて移動するなど、それだけで重労働であることに言及。機密性の高い仕事は自宅でせざるを得ず、資料も自宅に保管するほかないため、以前よりはるかに私生活の時間帯に研究する状態になっているとのべた。

「大学は専門知識を学ぶだけでなく、それを生かして新しいことができる人材を育てていくことが大切だ」とし、とくにAIなどの急速な技術革新によって社会や経済の枠組みが大きく変化していくなかで、先が見えない時代を創造的に開拓していく力をつけた人材を育成していくことが現代の大学に求められているとのべた。その力は、マニュアル化、アルゴリズム化できない人間的で試行錯誤的な営みのなかで育まれるものであり、密なコミュニケーションを通じ、悩んだり成功を喜んだり、相談したり、ときに対立しながらも、「ああでもない、こうでもない」と試行錯誤する時間を積み重ねることの重要性とそれができる環境こそが研究室であることを指摘した。同大学でもアクティブラーニングをとり入れているが、限られた授業時間のなかで調べて発表するといった表面的な学びにとどまっているという。

「受験生を増やすため」が優先され、その先の地味でコストはかかるが、もっとも大切な教育に必要不可欠な研究教育環境を整えることへの投資がおろそかになっていく―。もしこの裁判で梅光学院大学の研究室のあり方が認められた場合、研究教育環境の質よりも経営効率を優先しようとする全国の多くの大学で同様の事態が進行し、受験生に「映える」校舎などばかりに投資し、研究教育の中身をともなわない大学が増加していくことへの懸念をのべた。

この裁判は、来年三月に結審する予定となっており、裁判所の判断が注目されている。